

I(1)1. [明和二年十二月 砂鉄鑄錢座開設につき願書]

乍恐以書附奉願候事

一、去ル寛保元酉十月、久米村權兵衛・天下野村市郎平・中利員村三郎衛門・藤田村利兵衛四人遂内談以書付奉願候旨趣は、松岡御郡下浜々え自然と打寄候砂鉄吹立以其鉄鑄錢座被仰付候ハ、乍恐田畑は不及申上、何之筋二も無御故障莫大之御益二相成可申候、弥成就仕候ハ、此度相目論四人之私共えも相応之益分被下置候様二仕度旨奉申上候所、願之筋尤之由御聞届被成下、則其暮中願之通砂鉄鑄立可申旨就被仰付候、奥州より職人招呼、翌戌正月月中旬松岡御郡御手代會沢藤藏様御見分二付、右四人之者共御案内仕、久慈濱より赤濱迄入御覽、其後久川谷二御役所御立砂鉄吹立候所、則其鉄少々指上御吟味之上至極之上鉄二有之候旨御達奉承知、弥砂鉄出情為吹候砌、江戸表鑄錢座相止候二付、於御国も錢座難被遊候旨被仰付候、左候ては砂鉄之義吹立候俣相払候ては過分之御益二も相成兼、左候得は右四人之者得分申請候程之筋二も難相成、此義を以無是悲右一件相止メ申候、尤外故障之義御座候て相止候筋二は毛頭無御座候、尤前書之通鉄錢座相止候二付、吹立候鉄凡千貫目余、願人共所持之分小妻鍬鍛冶・太田鍋屋共え相払候所悉上鉄二て、上方より相下候鉄之外、奥州南部筋二て出来候鉄、御当国之鉄二ハ、難有御義奉存候、何卒此後も相調申度段申聞候得共、前書奉

申上候通鑄錢二不仕、只吹立候鉄二計相払候ては、御益薄願人共得分も少分之事二御座候故、無是悲相止申候段、慥承届置申候義二御座候事、

一、此度於江戸表鉄錢座被仰付、當時盛二鑄立候由及承候、左候得は此砌前件奉申上候、先年願之上被仰付候砂鉄鑄錢座之義、又々私共先年之趣得と承札、此度奉願上候は、前年之以御見合鑄錢座被仰付被下置候て、松岡御郡下之浜々砂鉄吹立、全ク御国内出生之鉄を以錢鑄立候ハ、莫々之御益筋二可相成御義と奉存候、尤砂鉄吹立候手段有増左二奉申上候筋ハ、浜々え自然二打寄候砂鉄何十年為取候共、浦々故障二相成候義曾て無御座候、尤鑄立候場所都て五六町四方、吹場・鑄場・賄所・会所等家々相建候連も、田畑二故障毛頭無之様二仕候、又々其所之潤沢ハ大能・君田・横川等之深山一錢二も相成兼候雜木を以鉄吹炭為燒候得は、其村々之益は莫大之義、或は薪鉄都て運送之駄賃之潤、其外諸事御領内之潤二相成候義は数々二て、御不益之筋曾て以無御座候様二奉存候、依之先年之以御見合願之通江戸表へ被仰合御判談之上私共え砂鉄鑄錢座之一巻致仰付被下置候様徧奉願候、此上弥願之通被仰付被下置候ハ、難有奉存諸道具、或は鑄場・普請人目等之義は、私共引請金主以相談持立候間、少も候、仍如件、

此上御苦難之御義等は曾て申上間敷候、何二も願之通被仰付被下置候ハ、難有御義奉存候、仍如件、

明和二年酉十二月

願人

馬場村

庄や五左衛門

和久村

庄や佐市衛門

御郡御奉行所様

(3—4 B1 1)

I(1)2. 「明和四年九月 太田村砂鉄鑄錢座開設につき願書」

乍恐以書附奉願上候事

一、此度松岡御郡下南久慈濱より北は磯原迄之浜々、砂鉄吹立其銑を以当御郡下太田木崎御立山下にて、横巻町豎式町之場所土地方御益は御見分之上蒙仰別段ニ指上、年季拝借仕其地にて銑鑄錢座仕候ハ、乍恐 御上之御益下諸村之潤格別成御儀ニ可在御座候哉と奉存候ニ付、相目論左ニ子細奉願上候事、

年数五ヶ年御益金

一、金六百七拾五両

但シ壹ヶ年ニ付

金百三拾五両宛上納

右砂鉄吹場式焙之積、若砂鉄打寄過分ニも相成候ハ、^(壁)焙

数相過シ、御益は此割を以過分ニ上納可指上候事、

年数五ヶ年御益金

一、金貳万五千両

但シ壹ヶ年ニ付

金五千両宛上納

此義は子細種々筆数多分ニ付、別紙仕用帳指上候事、

右相目論乍恐 御故障之御儀も無御座候ハ、此節何卒私共え被為 仰附被下置候様奉願上候旨趣は、去ル寛保元酉十月久米村権兵衛・天下野村市郎平・市左衛門・藤田村理兵衛四人之者共右之筋相目論奉願上候所、心味問吹就 被仰付候、早速奥州より其筋之職人共召呼砂鉄千貫目余吹立奉入 御見分候所、甚鉄生宜候ニ付、弥増吹立追々銑鑄錢座目論可指上之所、於 江戸表如何様之御振にて歟鑄錢座相止候ニ付、左候ては於 御国内も難相済候由相聞候間、砂鉄計之吹立にて御益金も少分之御儀、諸村之潤ニ相成候程之儀ニも無御座、専用は砂鉄計にては纔計故金主方更ニ無御座候ニ付、砂鉄吹立願之上相止罷在候筋、当願之私共其節之覚等も御座候所、此度は於 江戸表銑鑄錢座被 仰付当時盛吹立候由、当年ニ相成候ては此辺迄通用錢余程相廻申候、左候得は此節 御国之儀は砂鉄之産物有之候御儀ニ御座候得は幸ニ銑鑄錢座御故障之御儀も無御座候ハ、被為 仰付被下置候様、去戌之夏中も前件之通奉願上候処、乍恐如何様之御判談ニ御座候哉、難相済之由にて願書御帰シ被下置、残念至極ニ奉存候余り、愚昧之私共及相談候は、大金之御益可指上目論始終首尾能取計可申哉、猶又元金入用莫大之大金

可指出分際も無之者共故、全ク手段迄之儀ニテ無覺束、御尊慮ニも御座候哉と奉存候、就夫去年中奉願候節も江戸表数年入魂之挨拶柄分際在之候者共え得と申合仕候得共、猶又此度は別て申合金主屹ト相決、左ニ委細奉申上候、併奉再願候段不願恐候様ニは御座候得共、御上莫大之御益、次ニは諸村之潤農事之時節等は人歩相減更ニ農業故障等も無之様相目論申候、将又寛保年中之見合ニて奉申上候得は、於、江戸表鑄錢御止メ被遊候時節は相済不申候由、左候得は当時專銑錢為御鑄候砌、蒙御済口ヲ度奉再願候旨趣は、

一、金貳千兩 但シ卷ケ年金五千兩御益指上候内
前金上納御済口可申請候事

右前金上納之儀ニ付、金主方奉願上候旨趣は弥御判談相済候上大御公儀様御届相済候て、願之通被為、仰付候及旨趣候ハ、何卒願主共同様、御国御役所様え御召出シ一同ニ被仰渡、定て五ヶ年御請合之証文指上候事歟と奉存候間、左候ハ、願主・金主加判ニて証文指上、其上右願之通被仰付候、被、仰渡書奉頂戴并江戸御町方えも御届御座候て、金主方え水戸御領砂鉄鑄錢会所と申懸札裏御焼印ニて被下置候ハ、砂鉄鑄錢鑄場・吹場普請等五七ヶ月も可相掛候得共、其儀は無構、江戸ニてなりとも御国ニて成共、前金之金高少も無相違御上納可仕候由ニ御座候、左候得は、此度願書奉指上候ニ付、金

主姓名相願シ、願主同前御郡御役所様えも罷出可奉願上筈之所、江戸御町之御下知、右に金主ニ相立候儀は、右之趣不奉願候得は甚落度被、仰付候、然ル所、御国元御役所様御判談當時如何可被仰付候哉、猶又、大御公儀様え御届之次第も相分り不申候内、金主共より江戸御町方え奉御訴候ては甚異同仕、相済候筋も却て御故障も可在御座候哉と乍恐奉存候間、當時金主方之姓名之義は曾て以難相願候由、然レとも毛頭無相違次第は願主より幾重ニも被、仰立給候様ニ呉々申合候事ニ御座候間、前件之通被、仰付候迄ニ相成候ハ、懸ケ札蒙、御免金主江戸表より早速召下シ願主同道罷出其上ニて万事之御下知可申請候、併万一其節前金貳千兩指上候ても金主無覺束被為思召候歟、御故障等も御座候町人ニ御座候ハ、金主方何人も取替少も乍恐無御烏乱者金主ニ相立願之一卷御請之御下知可蒙、仰候間、以此御義重々乍恐金主之儀は無御疑心御判談被成下候様奉願上候事、

一、御国砂鉄生宜、浜々漁事等ニ付候ても曾て故障之義無御座候、其旨趣は寛保年中心味問吹被、仰付候節、砂鉄千貫目余出来鑄錢相止候ニ付、太田鍋屋・小妻鍛鍛冶共え相払申候所、南部・西国筋より相渡候鉄銑より甚鑄減無御座候ニ付、跡々何卒相調度候由申聞候、尤其節吹立候銑式三貫目、當時先願人権兵衛所持仕候間、御吟味御座候ハ、指上可奉入御覽候、将又其節浜々ニて故障申触候筋は、心味問吹之砌、金主共より出金未

無御座候内故少分之元金にて取羽立候間、漁事有之節も無其察
日雇錢は相払候得共、御用同前二為刷取候間、漁事之義は誠
一日二も大金取上候節も在之候故、其隙入二難義仕、夫故漁事
之故障と申候者も在之候由尤成義二奉存候、此度之義は願相濟
候得は金主初発より相掛候間、無漁にて浜々難義之砌計何程成
共為刷取置、漁事有之節は曾て砂為刷不申候様二仕候ハ、却
て浜々不漁之砌之潤二相成、此上少も故障之儀有之間敷奉存
候、猶又此外故障御座候て願出候ハ、如何様とも浜々不勝手
二不相成候様二可仕候、尤銅氣は漁事二も悉相障候由二候得
共、砂鉄は元来海中より磯辺え浪にて打寄候砂刷取候義二候
間、魚鼈之故障毛頭可在御座候義無御座候様奉存候事、

一、銅錢吹候ては、田畠故障二相成候二付、銚錢之義も其分を不
存、只錢座之下流ハ田畠不宜様申候者も在之候歟二御座候得
共、農具・鋏・鎌其外多分鉄にて拵申候儀、眼前は小妻村鋏鍛
冶・太田村鍋鑄年中田方之最寄にて年久吹打仕候得共、却て其
場所は年々田作宜候次第は小検見御見分にて明白二相頭、少も
鉄氣故障之儀可在御座筋二は不奉存候事、

一、浜方最寄之大能・君田・横川之深山無益之雜木砂鉄吹炭二為
焼候得は、耕作え相掛候猪鹿も住所連々薄ク罷成、自然と荒地
も相減可申候哉、指当候ては炭焼并付運候駄賃銀莫大之儀、山
中郷えは格別之潤二可相成候事、

一、太田村鑄錢場は凡千人余之人数年中相過候間、其雜用日々諸

日雇等諸商之賑合莫大之潤二相成候事、

一、鑄錢吹炭^夥移敷入用之儀は、小里郷・生瀬郷・保内郷にて深山
之雜木松炭奥山之樺炭為焼候て、久慈川筋は小舟を以上河合渡
場迄運送仕、場所二より馬附にて為相送候様二仕候ハ、山中
郷極窮之族迄相潤、又は田畠荒地等も自然二開發も出来可申
哉、左候得は相潤可申候筋二奉存候事、

一、鑄錢御国内は運賃・駄賃・日雇等にて自然二相過候間、其上
売出候ハ、錢相場引下過候て諸商人難義二も可存候間、江戸
え小川・当ヶ崎河岸より舟積為上候様二可仕候、左候得は、太
田より南郷野之上筋は運送駄賃之潤年中甚相過候間、困窮人も
馬相求、農業之間は駄賃二相懸候間、自然二馬數相過候得は、
農業作り高も格別二相過候間、荒地・散田も年々相減可申哉と
奉存候得は、格別之潤二可相成御儀二奉存候事、

一、御城下二は錢売場御免被成下候ハ、出店仕御家中様えは錢
時相場二何程下ケと蒙 御下知相払候ハ、纔宛之様にても御
勝手二も可相成候哉と奉存候事、

一、當時錢荷他所出シ之儀は御停止被遊候御事かと奉存候所、此
上は、前件之意味二御座候間、江戸表ハ不及申上、奥州・下
野・下総之隣国えは、望人次第売払付自由二相成候様、是
又御免奉願候事、

一、彼是愚昧之私共より奉申上候段、重々恐入奉存候得共、鑄錢
座掛り一卷江戸者沢山御国内え入込居候義二候間、御百姓方え

花麗之風俗押移、錢座相止候後迄之故障ニも可相成哉、又は太田村之義は百姓方と乍申、市場之人氣猶更郷中之風義取失永却て困窮之基ヲも引発可申哉など、御仁恵之余御故障之尊判も可在御座御義之様ニ乍恐奉存候、此義は、錢座惣人数凡千人と申候内、四百人は御国者日雇取にて、残六百人程役付・職人之部類江戸者入込候所、又其内五百人は職人にて江戸表二家持妻子も在之者共ニ御座候間、留主中暮方は妻子共え江戸錢売場会所より為引渡、此方にては月々割合小遣計相渡、少も奢ケ間敷事為仕候義ニは無御座候、尤元來職人至極之艱難成ル者其中々以於江戸も少も花麗之振舞相成候者共ニは曾て無御座候所、猶前件之通過分之渡方引分候間、曾て放埒奢ケ間敷事為仕不申候、残百人是は役付にて人柄を以大勢之下知取扱候者共却て身持悉相嗜少も過分之行跡為仕不申候、尤大人数之内不束候者共も御座候半、左候ハ、幾人なりとも江戸表へ為相登替り之人相呼候間、惡事等は仕間敷候、尤日々役付并諸職人共之働方却て御国内之者共へ為見習候ハ、五ヶ年之内式ヶ年は江戸職人にて仕、三ヶ年目よりは当国之人歩にて江戸職人招呼不申候共出来可申様ニ奉存候、左候得は永ク御国之御調法ニ可相成候哉と奉存候事、

一、御領内御停止事都て御法役人共え得と為申聴、屹卜為相慎少も不束之行跡堅為仕間敷候事、

右奉願上候旨趣 御判談之上、猶又願筋御故障之御儀も御座候て、次第御札之筋も御座候ハ、何分ニも願主・金主其筋之職人申合相成候程之義は相改可奉願候間、御吟味之御尋被成下候様奉願上候、且鑄錢之義先年於 御国も下御町にて為御鑄其場所錢座と唱伝候段相違ハ無之由承伝候得共、其年号等相分兼候、定て於 御上は御留書等も御座候御儀と奉存候、寛保年中奉願候節も於江戸為御鑄候得は御国にては相済候事之様ニ御沙汰在之候歟之由承伝申候、近クは仙臺にて 銅錢為御鑄候は諸人存知居候義其外国々ニ相済候古例も有之候由、此節於 御国は猶更相済可申御儀哉と乍恐奉存候、誠愚昧之私共目論宜ク蒙御済口ヲ候得は、莫大成ル 御益且は御国内之潤沢ニ可相成、毛頭願主・金主之勝手計相考奉願上候儀ハ曾て以無御座候間、幾重ニも 御判談之上弥筋宜クも御座候て、願之通私共え被仰付被下置候ハ、本意至極難在御儀ニ奉存候、仍如件、

明和四年亥九月

御郡御奉行所様

(3—4 B1 3)

I (1) 3. (〔明和四年〕 水戸鑄錢吹立願書草案)

水戸殿領分打続田畠不熟追年民力衰農業怠候程之儀ニ付、追々扶

助為取統候得共、困窮相増候間、領内之産砂鉄を以鑄錢吹立候ハ、一統澗(澗)にも可罷成哉と、領分百姓之内砂鉄取扱心得候者相糺候処、別紙名前之者砂鉄取扱功者之由ニ有之候得共、鑄錢仕方之儀は不行届義も可有之候間可罷成儀ニ候ハ、當時鑄錢吹方致候御当地金座人之差配ニ為致、諸事江戸表錢座之修法ニ随ヒ、取メ之儀は其筋之役人を附置為取計、一ヶ年錢拾貳三萬貫文程之吹高二いたし、右ニ付ては公義え御益金も為致上納、鑄錢売渡之事は出羽・奥州最寄之國々え為売出、来子(当)より午迄七ヶ年之間、農民為扶助鑄錢吹立候儀相済候様被致度候、此段宜御相談願入被存候、

(3—4 B1 4)

I(1) 4. 「(明和四年) 水戸鑄錢吹立願書草案」

(端裏書)
「此後相直候」

水戸殿領分打統田畠不熟追年民力衰農業怠候程之儀ニ付、追々扶助為取統候得共困窮相増候間、領内之産砂鉄を以鑄錢吹立候ハ、一統澗(澗)にも可罷成哉と、領分百姓之内砂鉄取扱心得候者相糺候処、別紙名前之者砂鉄取扱功者之由ニ有之候得共、鑄錢仕方之儀は不行届義も可有之候之間可罷成儀ニ候ハ、當時鑄錢吹方致候御当地金座人之差配ニ為致、諸事江戸表錢座之修法ニ随

ヒ、取メ之儀は其筋之役人を附置為取計、一ヶ年錢拾貳三萬貫文程之吹高二いたし、右ニ付ては公義え御益金も為致上納、鑄錢売渡之事は、出羽・奥州最寄之國々え為売出、来子より午迄七ヶ年之間、農民為扶助鑄錢吹立候儀相済候様被致度候、此段宜御相談願入被存候、

(3—4 B1 30)

I(1) 5. 「(明和五年) 水戸鑄錢吹立願につき意見書」

鑄錢之義は、定座之外不相成事ニ被仰出候ニ付、近來外々鑄錢願をも被差止候事ニ御座候、然は此度之儀も、一通りニては不相成事ニ候間、定座手先ニ附セ度と御願候得は、先達て定座え被仰渡候御主意ニも相叶候ニ付、御願之通可相済事ニ御座候、然共遠路之儀ニ候得は、取メ迄をも定座え被仰付候ては、所詮不行届儀故定座之者御請仕間敷候、依之御手前ニて定座之主法を仮り御取メ可被成旨被仰立候事御尤ニ奉存候、勿論左候ては定座手先ニ附候詮は無之様相聞工候得共、既ニ當時定座之取メ宜趣ニ御沙汰も有之候間、一体錢仕立方御定法其外取メ之御条目・小屋之壁書・出入改所場所内四方番所并取メ之役々等、諸事定座より願人え申達、尚又御役人中も御立合、右之趣御聞被置其主法通りニ御役人中より御取メ被成候と申事ニ相定候ハ、此所ニて定座之手先ニ附候詮は相立可申事ニ御座候、其

上二も年々御益金上納等之儀請負人より定座え直二相納申歟、其外取極り口上吹方二付て之伺類等も定座え常々申出候様二も致候歟、是等之儀は御差図次第二被成候積り二被成御心得、追て巨細之御尋も有之節は、此趣二御答被仰上候ハ、弥以公儀之御主意二も相当可致事二御座候、然共右段々之訳、初より御書面二顕し候ては全く御内通致候もの有之様相聞エ、却て御障二可相成候、畢竟右体之入組候訳は御存可有筈二無御座候二付、先之案書之通被仰立可然奉存候、勿論一向公義之御主意二戻り候ては御吟味二下り候所迄も参申間敷二付、案書之趣は御不案内ながらも自然と上之思召二相叶、難被捨置事二相成候様被認候事二御座候、左候得は自ラ巨細之御尋も發り可申儀、其上は尚又前文之趣を以追々二御答被成可然奉存候、是以早速二耽々と御答被成候ては宜間敷候間、随分御不案内之御心持二て何事も御差図次第可致候、先はケ様二相心得候と右之趣を以追々御返答被成可然奉存候、乍然是等之儀は一概二は難申上候御内并可有之儀二奉存候、呉々御内通致候もの有之様二ては御差障二相成申候、

一、別紙二願人名前を被認候は、是以右之心持を合候事二御座候、しかし御本書之内えは不似合様二相聞候間、御別紙可然候、
一、定座支配歟或は手先と認度候得共、是以御不案内之心持二被相認候、一体案書之趣は外々二て書文類文言は右体二相認候て

は不行届事二御座候、是以右之趣意二御座候、尤ケ様被仰立候ハ、自然と御尋筋可有之間、其節は十分之御文面も可有之候、
一、右二付ては、已来聊之事をも御しらせ被下候様仕度候、左様無之候ては存之外之心得違可有御座候、

一、吹高拾貳三万貫文と被仰立候ハ、公儀又は定座之申立二寄拾万貫文二相定り可申候、年季之義も同様二御座候、若又被仰立候通り二相成候ハ、御十分と奉存候、

一、御国之潤と申訳は、願人申出候通諸方之潤と相聞候、申上候迄は無御座候得共、御願書之内二は只一通り二認有之候間、追て御尋等も御座候ハ、御心得可有之儀二御座候、

一、出羽・奥州え捌候義、主意は先達て申上候通二御座候得共、是又御願書二は主意顯し不申候、

一、御別紙案之内、役人共より為何可申と申事、是は一体追々御伺事可有之と申儀、并定座え掛合候上積り書等相調候ハ、是又可被仰立と申事も相籠り候、然共此儀は定座よりも掛合相済候ハ、其節御届可申候間、双方より之申上二可相成候、然上は或は巨細之訳は定座より申出、御役人方よりは掛合相済候一通り之御届二て可然哉、是等之儀は追て御伺可被成儀、兼て御心得可有之事、且役人共より為何候と申御文言、是迄之御書風も可有御座間、敢て案書二御拘り可被成儀二は有御座間敷候、尤惣て其御心得と奉存候、

一、此間被遣候御案書御願書之御振合二候哉、但は先一通り御内

意被仰候ため之御書付二候哉、左候ハ、直ニ御願書之御文言ニ御直し被成、夫を以ケ様ニ相願候と御三方御銘々え御差出し被成、御内意被仰可然奉存候、弥左様ニ御座候ハ、此方より被差上候案も御文言御綴り直し可然奉存候、

一、右近將監様え御内意之節、ケ様之儀は何レえ吟味被仰付候哉と御尋被遊候ハ、御勘定奉行方え御下ケ被成候趣御答可有之間、然ハ御下ケ被遊候節、差急キ吟味致候様御声被掛候、左様致度旨能々御頼被遊可然奉存候、此儀万事え相響キ可申候、
一、案紙被差上候方は勿論、其外私式迄御内意申上候義申上候迄ハ無御座候得共、譬御親族たりとも相洩不申様仕度候、左様無御座候ては、追て御勘定所御吟味并定座之者え相糺候節、御為筋難申出差障り申候、尤一分二も迷惑仕候間、此儀御心得被置可被下候、

右ハ、案書被差上候方一体御不案内之程乍憚御心遣之由ニ御座候間、尚又自私愚意申上候、以上、

追加
一、御益金員数御尋御座候ハ、定座え掛合相済候上相定候高可申上旨被仰可然奉存候、

(3—4 B1 50)

I (1) 6. 「明和五年三月 水戸鑄錢吹立願書」

水戸殿領分打続田畠不熟追年民力衰農業怠候程之儀ニ付、追々扶助為取続候得共、近頃上屋敷并国元城焼失無間も不幸等有之、其後武士町不殘藏屋敷米等夥敷焼亡、弥困窮相増候間、領内之産砂鉄を以鑄錢吹立候ハ、一統潤にも可罷成哉と、領分百姓之内砂鉄取扱心得候者相糺候処、別紙名前之者砂鉄取扱方功者之由ニ候得共、鑄錢仕方之儀は不行届義も可有之候間可罷成義ニ候ハ、當時鑄錢吹方致候御当地金座人之差配ニ為致、諸事江戸表錢座之修法ニ随ヒ、取メ之儀は其筋之役人を附置為取計、一ヶ年錢拾貳三萬貫文程之吹高二いたし、右ニ付ては公儀え御益金も為致上納、鑄錢売渡之事は出羽・奥州最寄之国々え為売出、来子より午迄七ヶ年之間、農民為扶助鑄錢吹立候義相済候様被致度候、此段宜御相談願入被存候、

(後筆) (戊)

「右明和五年戊子三月十六日 公儀御大老松平右近將監様御内見之上、御

月番右京様え御指出候写、御使御家御老中山本宇衛門様

(3—4 B1 5)

I (1) 7. 「(明和五年) 四月 水戸鑄錢吹立願書」

水戸殿御領分打続田畠不熟、其上度々之火災損毛等ニて、農民扶

助之御手当行届兼候二付、御領分之産砂鉄を以、農民為扶助鑄錢御申付被成度由、右無摠御事二付、一ヶ年吹高拾万貫文を限、三ヶ年之間於御領分江戸定座差配にて、鑄錢御申付被成候様可被申上候、尤小沢九郎兵衛と申者、当時江戸表え被呼出置候由二候之間、諸事仕方之儀、金座人え致対談候様可被致候、且公儀え上納之御益金之儀も、右対談相済候上、員数等取極可被申聞候、

四月

(3—4 B1 6)

I (1) 8. 「[明和五年五月 水戸鑄錢吹立許可につき書付]

明和五年子五月朔日

一、

太田村大庄屋

小沢九郎兵衛

右之者、御国産砂鉄を以於御領分鑄錢吹立之儀願出候二付、農民為扶助鑄錢被 仰付度旨、公儀え被 仰達候処、御願之通相済候条、右御用筋此上猶更致出精万端大切相勤候様可申渡もの也、右之通、若年寄戸祭主馬殿より於御用部屋大吟味役え御達、九郎兵衛えハ於大吟味部屋申渡候事、

山野邊兵庫頭

山本宇右衛門

I (1) 9. 「[明和五年) 五月 水戸錢売場会所開設願書]

入谷六郎右衛門
若年寄
戸祭主馬
大吟味役
大関恒右衛門

(3—4 B1 7)

此度於太田村銃鑄錢吹被仰付相済申候、然は当御町錢座問屋相立候儀と奉存候、仍て乍恐奉願上候は、私共居宅店広御座候て、何とぞ錢売場会所二被 仰付下置候様二奉願上候、若又場所柄本町二限候儀二も御座候ハ、本式丁目私店分御座候て、家藏普請仕、右錢売場会所私罷出相勤申度奉存候、尤江戸表より金主共願人等時々罷下逗留仕、右錢吹用事太田より江戸表へ之書通或ハ金錢往覆通用も有之、御役所伺御用等申儀彼是御城下二会所無御座候てハ、用向相弁不申候儀と奉存候、錢問屋と申なら金銀兩替所同様之御事二奉存候、江戸表振合を以、時々相伺、毎日相場無滞売買取計仕候様可相勤候、尤大問屋計にて行届不申候事二も相成候ハ、其節願上小問屋相立候様二も可仕奉存候、私居宅ハ御町下筋二御座候得とも錢売場二ハ勝手宜所二御座候、錢儀ハ重々浜方漁場河岸々運賃等入用多御座候て、順路能御座候、殊下筋御町之義ハ、定商売店無御座、常体淋敷御座候処、錢売会所相立候へ

ハ、自然と御町並も賑合可申御事奉存候、右錢売場私共会所相勤申度旨奉願上候次第、乍憚左ニ申上候事、

一、私儀、前々より枝川村河岸并海老沢河岸・串引河岸所持仕、江戸運送諸荷物取計仕来候処、先達て海老沢御役所御取次を以願書差上申候次第、御領内荷物は不及申二、他領荷物御大名様御廻米等ニ至迄、奥州・常州・野州等より出申候産物、何品ニ不依夥敷事ニ御座候、右諸向より相廻之諸荷物仮令何百両高之荷物之積り、其内え為替金七拾両共内端ニ相積り、内借金仕、江戸表着船之砌、荷請問屋より為替金請取申候事ニ御座候へハ、湊え海上廻り荷物又ハ中川通船荷物ニても、海老沢表着岸ニて相改、内借金相渡荷物此方へ引取、串引ニて高瀬舟ニ為積江戸え為登申候、月々ニ廻り仕候百両之荷物相廻申候ものハ海老沢ニて為替金借用仕候て、又候商物調候て相廻申候ニ付、壹年ニて十二度相廻申候へハ、百両之本手ニては千貳百両之商物通用働キ罷成申候事ニて、殊之外御国内商人勝手ニ相成、馬持・舟持等道中之間屋共諸民之利潤ニ罷成申候事ニ御座候て、先達て奉願上候処、其砌御上ニも御金廻り無御座候由ニ付、先願書御返し被遊候て、折を以願候様ニ被仰付候て、是迄相扣罷在申候処、幸此度太田村鑄錢吹被仰付候へハ、御国内計と毎日吹出申候錢高売払捌兼可申御事ニ奉存候、左候へハ江戸表へ相廻し相払申事と奉存候、右為登錢高之内、海老沢河岸着岸荷物ヲ改之上、商人荷物高二応、金拾両・貳拾両・五拾両・百兩と

も其品ニ応して、荷物為替金内借錢ニて相貸候様仕度奉存候、村々商人之儀ハ材木板貫等年中相廻り申候、浜方干鰯・五十集物等、魚湊之荷物ニ御座候て、日雇錢・薪錢又ハ、職人等船方人足駄賃・運賃相払申候へハ、錢通用ニて勝手ニ相成申候商人共も帰依可仕奉存候、鑄錢座願人・金主等ニも、海老沢ニて錢相渡、代金江戸ニて為替請取之事ニ御座候所、其丈之錢江戸迄運送無世話、運賃等益ニ相成申候へハ、帰依可仕事と奉存候、勿論、私義、奥州・野州御大名様方御出入も多御座候へハ、御廻米引請道中入方等之分ハ錢ニて為替金等ニも取組候様ニも罷成可申候、左候へハ、御近国迄鑄錢行渡可申候、猶更御国中之儀ハ、商人共より為替金之錢相廻し申候へハ、早速行渡り可申御事ニ奉存候、第一海老沢表入舟之荷物高増過御津役御上納増長仕、莫太之御益ニ罷成候御事奉存候、湊并中川筋諸向共ニ運送荷高追日増過仕候へハ、甚以一統利潤罷成申候御事奉存候付、乍恐口上ヲ以奉願上候、愈奉願上候通被仰付被下置候ハ、重々冥加至極難有仕合奉存候、以上、

五月

御役所様

I (1) 10. 「(明和五年) 水戸鑄錢会所掛札につき願書」

(3—4 B1 82)

乍恐以書附奉願候事

一、御紋 水戸御用 御掛札壹枚

但シ、江戸会所分

一、同 砂鐵鑄錢会所 同 壹枚

但、水戸吹場会所分

一、同 御買穀御用 同 壹枚

但、水戸太田買会所

右は、先達て奉御窺之通、此度江戸表会所へ相渡并国本会所え持参仕候間、御焼印奉願上候、

一、(※) 鑄錢座御用取次所 掛札 壹枚

右は、水戸下町本四丁目駿河屋仁衛門方へ前々より申合置、此度諸用取次〔當時より為相勤候間〕所々仕候間、右掛札水戸表にて相認相渡申度候間

是又御免許奉願上候、猶又此表より太田吹場え直ニ御達被為遊

候御用筋も御座候か、都て書状等共ニ右仁右衛門方へ被為仰付被下置候得は、則吹場会所え相届候様申附置候間、右之名前御

役所様御留メニ被成下候様奉願上候、

一、先達て鑄錢一卷諸事御窺書壹冊指上置候、右之内被仰付候、相分り候次第も御座候ハ、此度御下知奉願上候、

一、先達て以書付奉願上候通、鑄錢被仰渡書式枚永々所持仕度旨、願之通何卒此度御別紙被下置候ハ、難有奉存候、

I (1) 11. 「(明和六年八月) 年中吹詰につき願書」

(端裏書)
「願之通御了簡相濟、丑八月廿三日指出」

同廿八日被仰渡候、同十月四日吹初申立候」

乍恐以書附奉願候事

一、去子五月朔日、鑄錢御免之蒙 上意、当座方之儀去子七月中金主同道罷下、願之通土地方御引渡申請、地形より取掛り、霜月中迄荒増普請出来仕、致試吹当丑正月十三日より吹初仕、職人共出情〔精〕にて日増出来高も宜、第一炭・松根・土・水之加減も宜〔偏〕偏一同難有御儀奉存候、併兼て相目論候より外大騒成御儀ニて、中々以願主・金主之私共力ニ相及兼候処、別段之御仁恵御取扱被成下候故、諸事無難ニ取納難有恐悦之御儀ニ奉存候、因茲何卒御定壹ヶ年金五千両御益之外繰たり共為冥加指上申度心懸ケ候得共、兼て相目論より外二人別も相掛り、普請入用或は暮シ方雜用悉相過、其上米相場高直出来錢払相庭、大元仕様帳ニは金壹両二付四貫五百文払二目論候処五貫文余二も相成、彼是存之外利用薄公納相納候得は元仕入金え引取候儀は何程も無御座候様ニて、前件奉申上候通余分之上納仕可申手段も無御座

候処、乍恐當々工風仕、左ニ奉申上候事、

一、老ケ月鑄錢吹方三日壹仕舞宛七吹

此日数廿一日

外休日 大月九日
小月八日

但、老ケ年大小半々之積

休日ノ百二日

七ケ年分休日ノ七百拾四日

此日数式ケ年分

右相積り候得は、七ケ年之内式ケ年休日ニ相潰申候、纔之年季之内、ケ様之休日在之候ては誠無益之儀ニ奉存相積候処、

二日壹仕舞二仕

三日目えは別職人入替、二日為吹、初二日之職人為相休、又候三日目之吹方え初吹之職人相廻候様二仕、無休日為吹候得は、職人之難儀曾て無御座年中吹詰相勤申候、此仕法を以相考候処、

一、当職人 八百九人

但、吹方仕上ケ方共二

外、新職人 貳百八拾人

但、吹方仕上ケ方共二

此度召抱申度分

如此召抱候得は、年中吹詰仕法出来仕候、

休日七ケ年分ノ

式ケ年 但老ケ年金五千兩積

此御益金壹万兩

内金三千兩

是は、前件之通新職人貳百八拾人召抱候給分并扶持方、或は流鉄吹所拾八人此普請入用并給分扶持方、地鉄余計ニ仕入候元金之分合彼是ニ相掛り申候、

残金七千兩 丑より未迄七ケ年分御益

但、老ケ年

金千兩宛

但、当年は被仰付候月割を以上納被仰付可被下候、

右願之通、年中吹詰被仰付被下置候得は、乍恐当年より御定金五千兩之外余計之上納も罷成、冥加至極奉存候、併此吹方之儀、全以私共過分之徳用相願候て存立候儀ニは毛頭無御座候、前件奉申上候通、何卒為冥加過分之上納も仕度相目論申候儀ニ御座候間、乍恐御故障之御儀無御座候は、早速御判談之上被為仰付被下置候様ニ仕度奉存候、左候得は誠目立候別普請仕候儀も無之人別相過候迄ニて相済候儀ニ御座候間、彼是右等之趣宜御判談之上、御下

知奉願候、仍如件、

願主 小澤九郎兵衛
同 堀江権兵衛
金主 関岡五郎兵衛
代仁兵衛

明和六年丑八月

同 間宮太兵衛
同 楠後文藏
代茂七

(3—4 B1 32)

I (1) 12. 「明和八年 水戸鑄錢座焼失後再開につき一件」

新鑄錢一件

一、鑄錢場之義は、重ク 公儀え被為願相濟候御場所之義二候
条、焼失之俣ニは決て難被指置候条、^{〔三付〕}早速 上之御物入を以
御普請被遊候間、猶此上は請負人等之場所等ニ心得違候ては以
之外相違二候条、此意味村役人ハ不及申末々之小百姓・水呑迄
二得と可申達候事、

附、先願主小澤九郎兵衛義、焼失跡取立相成兼候二付、
達て願之上、願主相除申付候条、此旨可致承知候事、

一、此後御取立之鑄錢場之義は、吹錢御国内ニて而替いたし候
故、直段下直ニ相成、百姓方傷ニも相成歟之由、粗取沙汰相聞
候条、今壹方分たりとも御国内ニて而替不為仕不殘他所売ニ申
附候条、然ル時は諸事潤のみ御国内益ニは相成、不益之事は更
ニ無之候条、此旨可致承知候事、

右式ヶ条之御触書、御国内中え被 仰出候後、新御場所御取立
御物入金指出し申度候事、

一、新御場所御普請金猶又諸仕入金調達近々より指懸候義之条、
此書付之面御判談之上弥宜筋ニて御内密蒙被 仰付候ハ、江
戸表え其筋之者早速為登、金子為指下諸事無御手支取計可仕候
事、

一、新御場所取立之義、先當時は一塙二仕、御益高吹立月より壹
ヶ年ニ金貳千五百兩宛御益指上可申候、来年ニも至塙數相過候
ハ、壹塙貳千五百兩之割ニて指上可申候事、

但シ、御益金納先納は不被仰付、年ニ何度となりとも

又々月々割合金納ニ成共、初發御下知奉願候事、
一、新御場所月々諸買物地鉄代等、毎月江戸表より金子指下し、
不殘金払ニ仕錢通用堅ク仕間敷候事、

一、鑄錢出来高日々取上ヶ置荷送り仕、今壹方分も而替不仕、他
国ニて相払申候義、少も無相違取^{〔計〕}払可申候事、

但シ、式壁二相過候ハ、御國中両替も不被仰付候て

ハ、錢代指替人無御座候間、先一壁之御積ニ仕度

候事、

(加筆)

〔又、此上は、御国内錢相減高直仕候ハ、穀留御番所にて通用錢出口御

留被遊候て成共、鑄錢御国払不被仰付候様奉願候事、

〕

一、御普請金ハ御郡方より御払ニ仕、メ高御入用程之金子は、少も無御手支新金主より御内々屹ト可指上候事、

但、普請出来候後は、金錢払方会所者へ御渡被下置候

事、又、御普請中たりとも、諸仕入金賄代等迄会所

え御まかせ可被下置候、少も無手支金子指出し可申

候事、

一、御場所新御普請建方絵図之義は、内々新金主より隠密ニ可指上候間、絵図御用可被下置候事、

一、新御場所出来候後、会所壁内人別役割諸仕入方、都て新金主之望ニ御まかせ被下置、他より入人入口等望御取上ケ無之様仕度候事、

一、元鑄錢金主多分故難取メ内々は既ニ難取統趣ニ相決候所、右之趣頭前ニ付壹人之世話元ニ相堅メ候故、悉成就仕候、猶此上は、他より之入金世話役等御指添無之趣ニ無御座候ては、新金主承知仕兼候事、

右之条々悉御承知被成下至極之御隠密ニ蒙 御下知候ハ、少も

無相違新金主相立、都て鑄錢座一件無滯為取計可申候、尤其節ハ新名前も可奉申上候、万一新金主へ申遣候て、大金為指出置、前件之内不叶尊慮御變之御義も御座候てハ、以文通遠方之金主へ御承知為仕置悉及難渋候間、書面之内難相成筋も御座候ハ、當時右之差別蒙被 仰付候上にて、新金主えは申談金子為指下申度奉存候、以上、

(ママ)
卯三月

(3—4 B1 39)

I (1) 13. 「(安永四年)十二月 日光豫山物入手当増吹につき書状」

来申日光 御豫山御物入為御手当鑄錢増吹自当夏被為願候所相済候迄ニ相成、無撓御故障出来相止候付、当未来申二ヶ年 公儀御益六千両水戸家へ執納被遊候様ニ被為成度候旨段々御願之所、当十五日御願之通相済候て、猶当節右拝借金三千両御上納金御年延都合九千両御益分ニ付、於小石河御一同御満足、於 御上悉御喜悅被思召、右一件小石川よりは御書附一度出候迄之事にて、初中終我等取計御願相済候故、悉之大劫御祢美厚思召候由、被 仰出冥加至極ニ候、我等身ニ取候ては是ほとの本望無之、誠ニ仏神三方之御加護力ニも候半と計存候、最早去極月御類焼之節金二一万両御拝借取掛相済、都合三品成就候間、此後は鑄錢首尾好相仕舞候迄之事と存候、余大慶故、右之旨為御知候間、得と可致承知

候、以上、

極月十七日 同九郎兵衛

小澤兵次郎殿

同 逸平殿

右之旨、御郡方へも御内々岡部茂十殿迄申遣候、

(3—4 B1 61)

I (1) 14. 「(安永五年) 十一月 鑄錢座焼失につき鑄錢延長願」

水戸殿領分鑄錢之儀、去々午年より当申年迄三ヶ年吹方被 仰出候所、吹場普請等二為取懸候故、午四月下旬より試吹相始、段々為吹続申候二付、来酉四月迄三ヶ年之月数有之、請負人共え兼て申附置候処、当三月中鑄錢場焼失二付吹方相休、普請為取懸出来、六月上旬より吹初申候、右之通焼失にて三ヶ月吹方相休、請負人共難儀之趣相聞候間、相休候三ヶ月たけを月送り二致し、来酉七月迄吹方相濟候様仕度候、大元農民扶助貸附金等取立候筋、不足相立彼是難渋之趣相聞候二付、前書之通三ヶ月吹方御指延相濟候様被致度候、此段宜御相談頼入被存候、

十一月

(3—4 B1 65)

I (1) 15. 「文久四年二月 鑄錢之儀につき被仰渡書等之写」

(横帳・表紙)

文久四年

鑄錢之儀二付被 仰渡書等之写

子二月

小澤梅次郎

水戸殿領分打続田畠不熟追年民力衰農業怠候程之儀二付、追々扶助為取続候得共、近頃上屋敷并国元城焼失無間も不幸等有之、其後武士町不殘蔵屋敷米等夥敷焼亡、弥困窮相増候間、領内之産砂鉄を以鑄錢吹立候ハ、一統潤にも可罷成哉と領分百姓之内砂鉄取扱心得候者相糺候処、別紙名前之者砂鉄取扱方功者之由二候得共、鑄錢仕方之儀は不行届之義も可有之候間可罷成義二候ハ、當時鑄錢吹方致候御当地金座人之差配二為致、江戸表錢座之修法二随ひ、取メ之儀は其筋之役人を付置為取計、一ヶ年錢拾貳三万貫文程之吹高二いたし、右二付てハ 公儀え御益金も為致上納、鑄錢売渡之事は、出羽・奥州最寄之国々え為売出、来子より午迄七ヶ年之間、農民為扶助鑄錢吹立候義、相濟候様被致度候、此段宜御相談頼入被存候、

右明和五年戊子三月十六日、公儀御大老松平右近將監様御内見之

上、御月番右京様え御指出候写、御使御家御老中山本宇衛門様、水戸殿連年勝手向甚不如意必至と行支出仕二も被相障候程之義二付、去已暮中も一ト通書面并口上を以も御達被申置候通、水戸殿平生着服等も輕品二被改都て聊成事迄被致差略候二付、連枝方合力も相減家中一統録高ニ准シ借上地被致候程之儀、此体二ては行々家中并民百姓扶助之手段も無之、甚難渋二被存、不及是非去暮鑄錢再吹被相願候処、別段之御義を以三ヶ年吹方被 仰出候二付、先百姓取続之手段ハ相立候間、年限通相濟候ハ、漸補之筋相調可申大悦被存候、併右之分を以当用勝手向之義ニは更二不行届候事ニ御座候得は、誠改革同前之儉約被申付候得共、折悪敷米穀下直、猶又当秋領分田畠半毛程之不作御座候故、当暮可相凌手段も無御座難渋之至御座候、依之別紙書付之通拝借洛残之内当暮二口ニて金三千両可被相納之所、前件之趣を以、相調兼候二付、何卒右拝借之内西年分壺口計も御年延被相願候、尤去暮より彼是被相願候筋も御座候間、可相成程ハ調達之手段も致候処、不残上納仕候ては、当暮家中渡金も不相成甚指支候二付、最早及月迫候得共、無拋被相願候、此所宜頼入被存候、

午

十二月

水戸殿領内
久慈郡太田村大庄屋
小沢九郎兵衛

右之者、当時江戸表え為呼出差置候、弥鑄錢吹立候儀相濟候様罷成候ハ、諸事仕方之儀、右之者え金座人より致伝達、積書等為仕立候様被 仰渡有之様被致度候、右二付てハ追々役人共より為相窺候様可被致候、

明和五年子五月朔日

一、

右之者、御国産砂鉄を以於御領分鑄錢吹立之義願出候二付、農民為扶助鑄錢被 仰付度旨 公儀え被 仰達候処、御願之通相濟候条、右御用筋此上猶更致出精万端大切相勤候様可申渡もの也、右之通、若年寄戸祭主馬殿より於御用部屋大吟味役え御達、九郎兵衛えハ於大吟味部屋申渡候事、

太田村大庄屋
小沢九郎兵衛

山野邊兵庫頭
山本宇右衛門
入谷六郎右衛門
若年寄
戸祭主馬
大吟味役
大関恒衛門
菊池庄之衛門

—I. 鑄錢願上一

水戸殿御領分打続田畠不熟其上度々之火災損毛等にて農民扶助之御手当行届兼候二付、御領分之産砂鉄を以農民為扶助鑄錢御申付被成度由、右無拠御事二付、一ヶ年吹高拾万貫文を限、三ヶ年之間於御領分江戸定座差配にて鑄錢御申付被成候様可被申上候、尤小沢九郎兵衛と申者、当時江戸表え被呼出置候由二候之間、諸事仕方之儀金座人え致対談候様可被致候、且公儀え上納之御益金之義も右対談相済候上、員数等取極可被申聞候、

四月

御本文之通、子四月晦日從公儀御達二候処、追て七ヶ年二御願被仰達候処、左之通御付札にて子五月廿五日從公儀御達有之候事、

来年より七ヶ年之間、吹方御申付被成候様可被申上候、右は付札二御座候、

鑄錢定座役名

後藤庄三郎支配

金座

年寄役

右役儀、往古より御用相勤候金座主役にて、鑄錢之儀も金座え兼帶被仰渡、尤定座二被仰付候、

右同断

触頭役
勘定役
右往古より御金御用相勤年寄役え差繼相勤候、

右同断

平役

右往古より御金御用相勤候、
右役儀相勤候者、一般之家筋にて代々相勤、役儀次第二昇進致候、尤以上之人数凡四拾人余、

此外定座手附キ之役立候者は、鑄錢被仰付候以後、由緒を以召抱候、

子五月

覚

一、鑄錢方伝達覚書

老冊

一、江戸会所壁書之扣

老冊

一、銑鑄錢仕用一卷

老冊

一、金座後藤庄三郎掛ケ合

老冊

一、金座并鑄錢座え掛ヶ合一卷

壹冊

一、砂鉄鑄錢座普請仕様帳

壹冊

一、鑄錢諸道具之覚

壹冊

一、砂鉄仕用帳

貳冊

一、金座并鑄錢座え掛ヶ合候別紙書

但、壹番より五番迄控

壹冊

一、鑄錢座絵図面

壹枚

一、願書

ノ五通

右私共所持仕候鑄錢之儀ニ付筆記類并被 仰渡書等之写、前件之
通取調奉入御覽候、尤伝来仕候書類ニも御座候得ハ、申上候迄ハ
無御座候得共、御用御済ニ被成候ハ、何卒御下ヶ被下置候様仕
度、此段奉願上候、以上、

文久四年

子二月

小澤梅次郎

(3—4 A1 12)

I (2) 1. 「明和五年五月 金座鑄錢定座役名書」

(封)
「鑄錢定座役名書」

外此方末書入」

鑄錢定座役名

後藤庄三郎支配

金座

年寄役

右役儀、往古より御用相勤候金座主役ニて、鑄錢之儀も、金座
え兼帶被 仰渡、尤定座ニ被 仰付候、

右同断

触頭役

勘定役

右往古より御金御用相勤、年寄役え差繼相勤候、

右同断

平役

右往古より御金御用相勤候、

右役儀相勤候者、一般之家筋にて代々相勤、役儀次第二昇進致候、尤以上之人数凡四拾人余、

此外、定座手附キ之役立候者は鑄錢被 仰付候以後由緒を以召抱候、

子五月

(3—4 B1 13)

I(2)2. 「(明和五年) 小澤九郎兵衛諸事仕方につき覚」

水戸殿領内

久慈郡太田村大庄屋

小沢九郎兵衛

右之者、当時江戸表え為呼出差置候、弥鑄錢吹立候儀相濟候様罷成候ハ、諸事仕方之儀、右之者え金座人より致伝達積書等為仕立候様被仰渡有之候様被致度候、右二付ては追々役人共より為相窺候様可被致候、

(3—4 B1 83)

I(2)3. 「(明和五年五月) 金座鑄錢定座より職人召抱につき達」

(封)
「覚書」

江戸・伏見定座相勤候鑄錢吹方之者・細工人等、水戸表鑄錢方え罷越候ハ、一応江戸定座え御引合差障無之段申遣候上、御召抱可有之候、且江戸・伏見共不埒にて暇差遣候者有之節は、当人生国・住居・名前等相認、江戸会所迄可差遣置間、其者被召抱候儀可為御無用候、尤水戸表細工人等之儀も前文之趣ニ定座ニても相心得可罷有間、不埒之者等有之節は書付可被差遣候、尤右之段伏見定座えも可申合置候、以上、

子五月

江戸
鑄錢定座

(3—4 B1 15)

I(2)4. 「(明和五年六月) 金座ならびに鑄錢定座え掛合候一卷」

(堅帳・表紙)

金座并鑄錢座え掛ケ合候一卷

一、私儀四月廿三日皆川与太夫殿差添ニて金座後藤庄三郎方え罷越候処、於吟味所庄三郎名代吟味役高橋只七・佐原木路九八両人对談之上、御困^国砂鉄と申物性合如何様之品ニ候哉、猶又錢ニ吹立宜品ニ候哉相尋候間、口上ニて段々相答候所、右答此席ニて直ニ書面ニ相認候様申聞候ニ付、砂鉄之儀名目は替り候得共余国より出候銃とひとしく、猶又錢ニは吹立見不申候得共錢ニ似寄り候品ニ吹立見候処、宜出来候之旨、即席書面ニ認相渡申候、

此別紙壹通

一、四月廿五日金座より申来候は、国元より致持参候砂鉄致吟味候間、名代役を以可差出由ニ付、砂鉄三貫八百目箱入封印ニて名代ニ為持差出シ申候、此節右品ニ添差出候書付、

別紙一通

一、四月廿六日、金座より申来候は、昨日之書付御勘定所え差上候間、致印形名代役を以差出候様ニと申来候ニ付、江戸会所元堀江平右衛門ニ為持差出候事、

一、五月三日、後藤庄三郎方え呼出ニて罷出候処、此度相濟候鑄錢願金座之差配ヲ請候様申達候儀、如何之差配ヲ請候心得ニ候哉、当時伝達請候儀は格別末々迄伝達請候存寄ニ候哉、公儀上納筋之儀は如何取計候哉之旨、書面ニ相認差出候様申聞候ニ付、承届罷歸り候事、

一、五月四日、右三件之趣委細書面ニ認、名代江戸会所元堀江平

右衛門ニ為持金座え差出シ高橋只七ニ相渡シ罷歸り候事、

此別紙一通

一、五月十一日、龜戸於鑄錢場及対談候、御用有之候間絵図面持参罷越候様ニ申来候ニ付罷出、金座後藤庄三郎名代役高橋只七立合、座人年寄坂倉源右衛門・久保田仁右衛門、座人触頭役坂倉九郎次、勘定役大坪平七、私及対談、鑄錢之仕法新古之訳悉相尋候間、口上を以委細ニ申開候、絵図面之儀古法と相見え甚不勝手ニ相見え候間、相直シ追て差出候様ニと得差図罷歸候、

一、五月十二日、右絵図認替、名代役為持鑄錢場役所え差遣候、

一、五月十八日、鑄錢場え罷出候様金座より申来、則罷出候所、金座名代吟味役高橋只七、座人年寄朝田忠左衛門、久保田仁右衛門、座人触頭役坂倉九郎次、勘定役大坪平七列席ニて、

鑄錢伝達覚書 一冊

鑄錢目方書 壹枚

鑄錢役名書 壹枚

絵図面之要用書 壹枚

相渡シ、其上口伝之事共数多有之、右書付相渡シ候分は私方え留置、右同様別ニ相認末書名前致印形、名代役ニ為持差出候様申聞、絵図面は又々相直候様申聞相返り候事、

一、五月廿一日、絵図面并前件伝達目方書・役名書・要用書請書相認致印形、名代役柴田九右衛門ニ為持差出候処、座人触頭役坂倉九郎次請取、

職人召抱之定法書 一枚

其節相渡是又請書認日限之儀は、此方より案内次第致持参候様
二と申聞候事、

一、五月廿三日、鑄錢座え直二罷出候様、尤水戸鑄錢場え召抱候
名主役之者可召連旨申来候二付、鑄錢名主役彦八と申者召連、
其上絵図面并職人召抱之定法書相認持参仕候、然ル処、絵図面
之儀先達て好之通二は出来候得共、又々工夫有之候間迎之儀左
様相直候様申聞候二付持返り候事、

附、龜戸鑄錢座見場と申役所え案内有之、彦八召連私罷
通り、私ヲ上席ニ差置、庄三郎名代役高橋只七、佐原
木路九八、座人年寄朝田忠左衛門、久保田仁右衛門、
触頭役坂倉九郎次、勘定役大坪平七居並^(縁)椽頼通り候、
龜戸錢座名主兩人彦八と新古鑄錢之仕法我々立合を
以、悉為致論談候所、首尾能相調彦八召連罷帰候事、

一、五月廿五日、金座より申来候は、龜戸鑄錢場見分御勘定所伺
相濟、廿六日二龜戸え可致案内候間、罷出候様申来罷越候所、
大坪平七、坂倉九郎次^(運)遂一案内にて、大吹所・小細工所迄不殘
致見分、此方絵図之理方引合罷帰申候、

一、右鑄錢場之理方伝達ヲ以絵図相改、五月廿九日龜戸鑄錢場え
差出申候、

一I. 鑄錢願上一

右掛之御用一卷無滯相濟候二付、初發より之次第書上申候、以上

明和五年

子六月

大吟味御役所様

小沢九郎兵衛

(3—4 A1 4)

I (2) 5. (明和五年) 六月 水戸鑄錢座絵図面につき口上書

口上之覚

昨日御口上書を以被仰聞候は、去月廿九日再往御伝達之上取メ方
相究、鑄錢場絵図面指出候所、宜相見候二付、其趣ニ取極メ可申
旨承知仕候、猶又右之旨御支配所へ被仰立候間、私方よりも右之
段御届可然候由御申合御口上書被下候所、昨日より小石川御用ニ
罷出止宿仕、只今帰宅仕致拝見候、左候得は今日之御間に合申間
敷候間、明日御届可仕哉、猶又右日限及御相談度、如此御座候、
以上、

水戸大庄屋

小沢九郎兵衛

六月五日

(3—4 B1 69)

I (2) 6. (明和五年) 六月 水戸鑄錢会所掛札につき伺

一^(封)六月四日、金座人相馬五兵衛罷越差置候口上書